

楠 木 正 成

—「楠」と「楠木」2つある姓の謎?—

43期生

I テーマ設定の理由

今年、平成元年となり歴史の流れの大きな節目となった。しかし人々の心は本当に節目を迎えたのだろうか。毎日毎日同じことをくり返しているだけのように思える。思い返せば現在から遡ること600余年、当時日本は大きな歴史の節目の時期であり大混乱の時代であった。そんな時、自分の信念を貫き通し、波乱の一生を精一杯生きた楠木正成に現代人は学ぶところが多いのではないだろうか。

時代の節目にあたって自分はどのようなことをすればよいか過去の大先輩に学ぶため先輩のことも少しは知っておこうと思い研究を始めることとした。

II 研究方法

史跡の町「富田林」に住んでいながら正成のこととなると無知に等しい。無知に等しい人を調べるので、まとまった研究方法は書けないが、この時代を代表する書物である「太平記」を読み深め、まとめあげ、疑問点を解明したい。

- (1) 文 献 太平記を原文で読み、解説書と照らし合わせてより深く読みとる。
- (2) 現地調査 千早城など正成が建てたといわれる城を歩いてみる。

III 研究内容

1 「楠」と「楠木」2つある姓の謎?

楠木正成という名前は皆さんもよく知っていると思います。知らない人は国語辞典をひいてくれれば大体のっているでしょう。そこで国語辞典をもう一度よく見て欲しいのです。余り小さい国語辞典ではのっていないかもしれませんが、大部分の国語辞典には「楠木正成」の後に「楠正成」の名も続けてのっているでしょう。旧字体、新字体の例外を除いて、人の名前が2つのっている人物は正成以外いないのではないのでしょうか。では何故このようなややこしいことになったのか、まずそれについて調べたいと思います。

南北朝時代の動乱を今に残す書物として「太平記」というものがありますが、「太平記」には「楠正成」の名でできます。というより「太平記」を含み明治時代までに書かれた書物の中では、「増鏡」と言う書物を除きほぼ100%が「楠正成」と書

▼写真1 観心寺大楠公像



かれています。しかし第2次世界大戦が終わってからの書物では、依然「楠木正成」の占める割合が増えています。一体戦時中の日本に何があったのでしょうか。

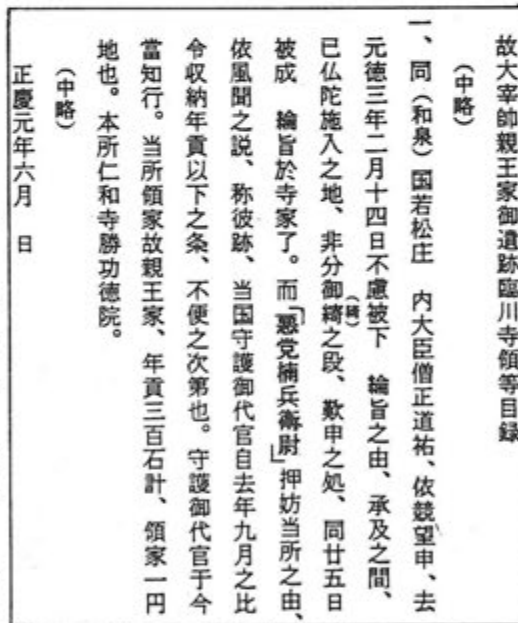
南北朝時代から明治時代と戦後の現代との一番大きな違いと言え、政治形態はもちろんのこと天皇の権限というものがまず第一にでてきます。近世日本で天皇は神聖視され、それに忠義をつくすことは素晴らしいことだとされてきました。そんな中で正成は天皇への忠義をつくし、最後までその信念を曲げなかった者として、天皇に対しての忠義の見本として親しまれ敬われたのでしょうか。そこでそれが「楠」と「楠木」に、どうつながるかということですが、おそらく「楠」というのは朝廷でのみ使われる略名であったと考えることができます。朝廷の役職は長い漢字を連ねたものが多かったためややこしいものは避けたのでしょうか。また武家政権時代、楠木氏の子孫はその思想から迫害を加えられていました。現に一族は「大饗」と名を代えひっそりと暮らしていたことが分かっています。正成7代目大饗正虎は織田信長のとりなしで楠木河内守正虎となりますが、この時「楠」の姓を意識したのかれどうかは、よくわかりません。正成の故郷千早赤阪村では毎年春になるとナンコウサイ(楠公祭)というものが行われますが、「楠木」と書いては「ナン」とは読めないということも、面白いことかもしれません。

2 正義の味方正成?

中世の書物に正成は実際よりも誇張してよく書かれています。しかしこれらを読んでいるうちにわずかな文ですが、他の物とは根本的に違う文章を見付けました。図1がそれですが、正成を正義の味方だと思って研究してきた者にとって大きな妨げとなったことが分かるでしょう。

まず分からないのは「悪党」です。農民が皇室直属の武士に対して、いくら年貢を取られたとはいえ、悪党などというのでしょうか、というところで、先程辞書を持ってきて手元にある方は、「悪」という字をひいてみて下さい。広辞苑並みの辞書でなければのっていないかもしれ

ませんが「悪」という字には2つの意味があることが分かるでしょう。まず皆さんが予想していたであろう「良」に対しての「悪」です。そしてもう1つ「悪」には、「猛々しく強い」という意味もあったのです。この文章の場合、その意味合いは明らかに後者の方です。同じように「党」もひいてみると「中世の武家集団」とあります。「悪党」についてはこれで良いのですが、もう一つ年貢の横暴ということがあります。このことについて「太平記」に、「其之頃、國中ノ民家ヲ追捕シテ兵糧ノ為ニ



▲図1 臨川寺等目録文書

正慶元年六月 日

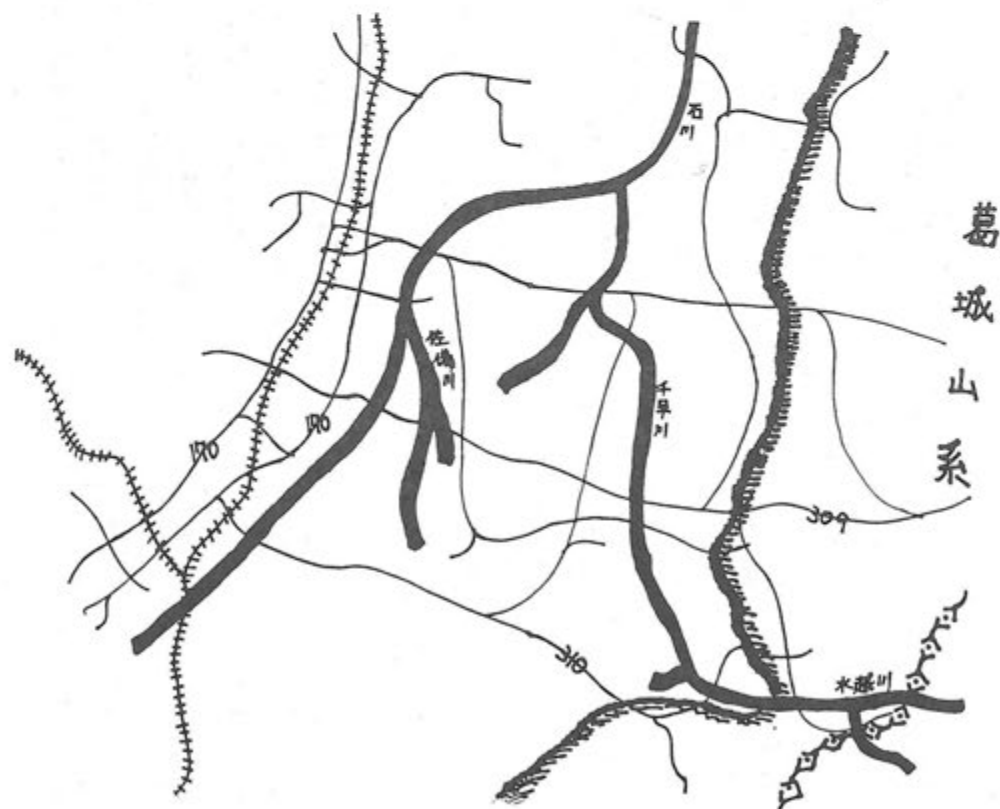
故大宰帥親王家御遺跡臨川寺領等目録
(中略)
一、同(和泉)国若松庄 内大臣僧正道祐、依競望申、去
元徳三年二月十四日不慮被下 輪旨之由、承及之間、
已仏陀施入之地、非分御轉之段、欺申之処、同廿五日
被成 輪旨於寺家了。而「悪党楠兵衛尉」押妨当所之由、
依風聞之説、称彼跡、当国守護御代官自去年九月之比
令收納年貢以下之条、不便之次第也。守護御代官于今
當知行。当所領家故親王家、年貢三百石計、領家一円
地也。本所仁和寺勝功德院。
(中略)

運ビ去リ、己ガ館ノ上ナル赤坂城ニ兵五〇〇騎ニテ立テコモリ候」とあり、第一次赤坂城攻防戦という合戦において、幕府軍八万騎と戦った正成は兵糧攻めに合い、下赤坂城を開けわたして後退する際、兵糧とする為民家をおそったということで良いことで、あるとは言えませんが、ある程度やむをえなかったと言えます。

3 正成は一体何者

先程皇室直属の武士に対し……と言いましたが、正成の身分に関してはまだよく分かっていません。図1の文を読む限り「兵衛尉」という役職があります。「兵衛尉」とは当時の「衛府」という役所の役人（衛府官）の1種で、一般の後家人から幕府の推薦でなるものでした。というところまで話をすすめると、正成が幕府を敵に回したわけが、分からなくなります。衛府官になれる人が後家人だったことは前に書きましたが後家人にもいろいろなタイプがあります。まず一般の昔から後家人であり將軍家につかえ、その命によって行動するタイプ、公家直属のタイプ、寺社直属のタイプ、皇室直属タイプなどです。このうち直属の武士は幕府の許可なしで衛府官になることができませんでした。この中に正成はいたはずですが、しかし、直属の武士は護衛が主であったため正成のように土地をもったりするのはおかしいはずですが、では一体……というところで天皇（後醍醐）と正成は一体どのような関係にあったのでしょうか？

▼図2 南河内水配分の図



いきなり地図がでてきてびっくりした方もいるかと思いますが、南河内は山がちな土地だけに水の配分という問題があり、たえず争いのおこっていた所です。というのも水越川という川が水源は大和国、流れてるのは河内国というややこしい川であったからです。正成はいち早くこの川の合流点に城を築き、この地を平定したのです。正成は年貢制を領地で採用し（このころ農民は自分の館へ住まわせて働かすのが当前だった）多くの農民の信頼をおつめました。

関東の武士とちがって、年貢を取るためには土地と農民が必要です。農民を第一に考え、守ってくれる正成を見てより多くの農民が味方についたでしょう。その上水の配分を行っている正成です。この地を一時で押さえられたのも無理はないでしょう。

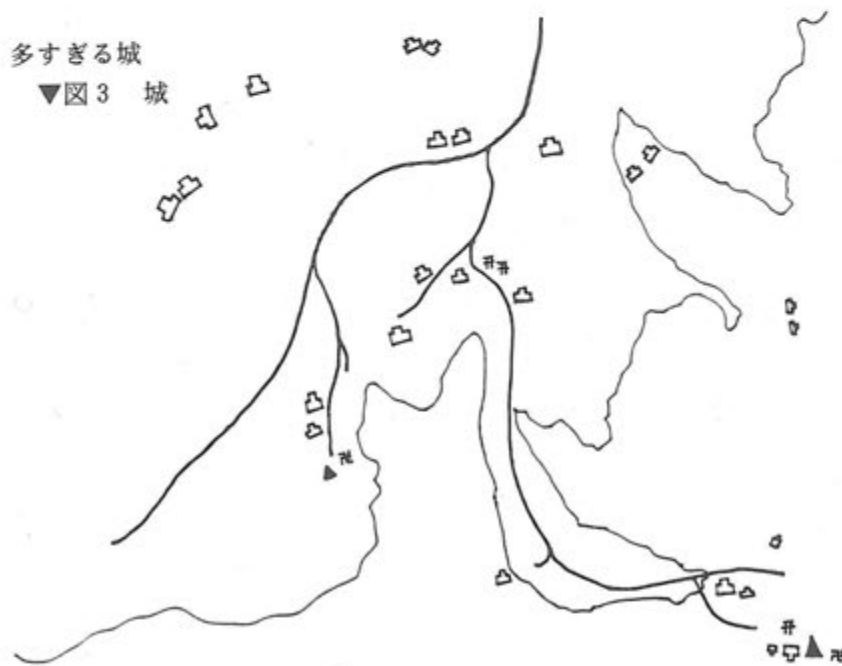
天皇は倒幕のため、少しでも多く軍隊を集めなければなりません。そこで、兵数に多いとはいえないものの、兵团としてよくまとまっていた正成軍はうってつけの味方であったろうと思います。

もう一つ、文献によると後醍醐天皇の筆記は正成の筆記に似ているということが載っていました。つまり同じ師に学んだのではないかと。ということ。後醍醐天皇の師は天台僧玄恵で、玄恵の教えは古く中国南北朝時代の教えを受け継いでいました。玄恵は2人に「幕府は一時的な権力であり今でも朝廷につくすのが忠である」と説いたのです。正成は単に戦略的に天皇に見込まれたのではなく、クラスメイトであり、同じ思想を持つ親友だったのです。

しかしこの説にも一つ弱点があります。正成ゆかりの寺として「観心寺」がありますが、この寺は真言宗です。その他の寺も正成のかかわった寺はほとんど真言宗なのです。これは古来より金剛山自体が真言宗の霊山とされてきたからでしょう。天台宗と真言宗の交じり合った地、それが河内国なのです。

4 多すぎる城

▼図3 城



地図は明治時代の学者の有力な意見であった金剛山大要塞説です。見て分かる通り、現在の軍事兵器をつかって金剛山にとうたつするのは無理だと考えられ、当時の兵力ではとうてい無理であると考えられます。ところがそこにこの問題の落とし穴があるのです。

無理だ／＼と考えた理由は、いろいろあると思います。まず敵と味方が同じ戦力の場合、山の上というのはとても都合がいいからです。見わたせる広さはもちろんのこと第一に打ち上げと打ち下ろしでは弾の飛距離がぜんぜんちがうのです。また、金属や強化新素材をふんだんにつかった要塞の破壊はむずかしく、その前に中からの射撃でやられてしまうでしょう。しかし近代兵器が通用しないからといって、中世の兵器が通用しないということはありません。近代兵器と中世兵器の一番のちがいは火器の使用による攻撃の飛距離と破壊力にあります。地図によると城の間は0.5～1kmもあり、弓矢がとどく距離ではありません。攻めてきた敵は城の間をぬっていけば良いわけですから、こんなに簡単なことはないでしょう。第一、兵数の少ない軍が多く城に兵を分配すると、一つの城に当たる兵が少なくなり、結果として、城としての役割を果たさなくなります。

では一体なぜ正成はこんなにいっぱい城をつくったのでしょうか。それについてこのごろ新しい説が出されました。それは、城を点として見るのではなく線としてみたのであろうということです。城をつないで壁とし、戦わずして後退して幕府軍をかく乱したのです。

ところで南方にほとんど城はありませんが3で書いたように金剛山はいにしえより霊山とあがめられていたため、山中で戦うのをこぼんだためであるといわれています。

IV 結 論

現代人は“楠木正成”というと、天皇に従う、従わない、ただそれだけのこととして考えてしまうことが多い。これは近代日本のおかした大きなミス、つまり戦争によって考えられることである。正成の忠君の心が尾をひいて、とんでもないことをしてしまったと考えている人もいるだろう。しかし正成にせよ、戦時中の人にせよ、何かが変わると考えていた。自分にもよくわからない何かを変えないといけなかった。戦争はだれが考えてもおろかなことであるが戦時中の人がおろかなのではない。戦時中の人には日本の美しい国土と文化を守るために命を捨てて戦った。この考えが正しいとはいえないが、この人々がいなくては今の日本がなかったということ、そして“信念”ということを考え直してみてもはどうだろうか。

V 研究を終えて

この研究をしていくにあたって多くの人々の心の温かさを知った。

せまくて暑いロープウェイの中から戦いの有様を教えてくれた金剛山ロープウェイの方、台風で山崩れがおきたことを教えてくれた駐車場の方、また、ロープウェイ千早駅において数々のアドバイスを下さり、この研究にとっても、大きな役割を果たして

下さいました村田氏、ほか、市役所観光課、近鉄観光、中央図書館など多くの人々の協力において、十分とはいえませんが、無事終了したことを喜ぶとともに、感謝の意を表したいと思います。

VI 参考文献

1 歴史書

増鏡
大平記
楠木合戦注文
大日本史料

2 史誌

富田林市誌 第四巻
富田林市史
千早赤阪村誌

富田林市役所
元市長尾崎茂一以下8名
千早赤阪村役場

3 単行本

大楠公
楠木正成
楠正行
歴史の中興

吉田智郎
植村清二
田中俊資
読売新聞社